

## 沖縄インド人コミュニティの音楽

著者	小日向 英俊
雑誌名	伝統と創造 : 東京音楽大学民族音楽研究所研究紀要
巻	5
ページ	43-55
発行年	2015
出版者	東京音楽大学民族音楽研究所
ISSN	2189-2350
著者版フラグ	publisher
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1300/00001087/">http://id.nii.ac.jp/1300/00001087/</a>



# 沖縄インド人コミュニティの音楽<sup>1</sup>

## Musics of Indian Communities in Okinawa Island

小日向英俊 KOBINATA Hidetoshi

世界のインド人移民コミュニティの中で、滞日コミュニティは規模も比較的小さくあまり知られていないが、神戸、横浜に住むインド人移民については雑誌などにも取り上げられることがある。明治期に始まる比較的長い移民の歴史があるためである。ただ沖縄県の事例については情報は少ない。本稿は2012年の予備調査後、2015年に実施した短期フィールドワークに基づき、彼らの音楽活動の中心に位置する宗教歌謡の現状について中間報告を行い、今後の研究課題を示す。

ホスト社会とその中に居住するマイノリティの音楽については、シンクレティックな変容の有無が目され、ホスト社会の音楽との一定の融合が観察される場合が多い<sup>2</sup>。本稿で扱う事例ではこれが少ないと考えられ、この点についても考察する。

キーワード：沖縄 Okinawa、インド人コミュニティ Indian community、  
バジャン Bhajan、宗教歌謡 Ritual music、シンクレティズム Syncretism

### 1. はじめに

世界における異文化音楽の受容の契機は、1. 植民地経験、2. 移民、3. 文化政策、4. 私的興味などに分類できる。筆者による南アジア音楽(舞踊)の日本における受容研究<sup>3</sup>の中で、沖縄にインド人コミュニティが存在すること、宗教音楽の演奏事例が存在することを知り、関心をいだいた。教育制度、放送、準公共性を持つ音楽出版などを通じた受容や、日本人の私的興味によるインド音楽受容のモードではなく、移民による音楽受容の例を考察することになると考えたからである。そのコミュニティの人口も160人弱程度と小さく、全体を見通すことが比較的容易である。

後にのべるように、日本に居住するインド人のマジョリティは横浜と神戸に在住しており、筆者も横浜在住のインド人コミュニティの音楽行事についても若干の調査を行った経験はある。また、近年増加の一途を辿る東京都東部におけるIT系職業に従事するインド人の増加についても、若干の調査を行ったことがある。ただ、沖縄にインド人コミュニティが存在すること自体について知識は不足していた。

本稿では、現在までの現地調査の中間報告として、彼らのコミュニティとしての性格、その宗教音楽に関する活動の概略についてまとめ、今後の調査の課題を確認したい。

## 2. 用語について

狭義の「移民」とは就労を目的とする外国への移住であり、移住先での居住期間や国籍の取得状況を問わないとする見解がある。一方、広義では就労目的以外の移住(者)として、とくに難民自身と移住者・難民の家族や子孫も含め、インドやパキスタンなどの出身国以外に居住する場合も「移民」であるとする場合がある[古賀ほか 2000:i-iv]。本稿の対象となるインド人コミュニティの場合は、前者の狭義の定義に当てはまる移民であり、沖縄に居住する以前にも既にインド本国を離れ、例えばシンガポールや香港などにいた家族を出身とする例が散見される。またインタビュー[小日向 2012e、2012f、2015b]などからは、彼らの商業を中心とする生計環境の変化に応じて、他の地に再度移住して行く例も見られた。

また、母国を離れて異国に居住する人々については「ディアスポラ」の用語を使用することも多い。これについては、理由のいかんに関わらず父祖の地(国)を離れて他所に移り住んだ集団をディアスポラと称し、以下の5カテゴリーに分類する(特定の民族が複数のカテゴリーに分類される場合も多い)という見解がある。つまり、1.「被害」ディアスポラ(ユダヤ人、アフリカ人、アルメニア人) 2.「帝国」ディアスポラ(イギリス人) 3.「労働」ディアスポラ(インド人) 4.「交易」ディアスポラ(中国人、レバノン人) 5.「文化」ディアスポラ(カリブ海域の人々)の5つである[古賀ほか 2000:i-iv]。本稿のインド人コミュニティの多くが、交易、商業上の理由から沖縄での居住を選択しているため、上記のカテゴリー4.に相当すると考えられる。<sup>4</sup>

さらに本稿では「南アジア地域移民」、つまりインド、パキスタン、ネパール、バングラデッシュ、スリランカなど南アジア地域からの移民と、「インド人移民」を区別する。後者は、国籍別統計で集計するところのインド共和国からの移民とする。確かに歴史的には英領インドから移民を意味する場合もあるが、本稿の対象者は第二次世界大戦以後の移民であるため、共和国出身者の意味で「インド人移民」の用語を使用する。

「バジャン(Bhajan)」とはヒンドゥー教徒の宗教歌であり、神を称揚する、神に関する事績を示す内容の歌詞を持ち、器楽伴奏を伴う場合と伴わない例がある。本稿では、宗教歌バジャンを歌うために参集する集会を、「バジャンの会」と表現する。<sup>5</sup>

## 3. 沖縄とインド人移民

本項では、まず日本および沖縄県内の南アジア系移民の現状について確認する。図1は2014年度の在留外国人統計[法務省入国管理局 2014a、2014b]により、日本全体に在住する南アジア系居住者と沖縄県内の同居住者の人数を比較したものである。

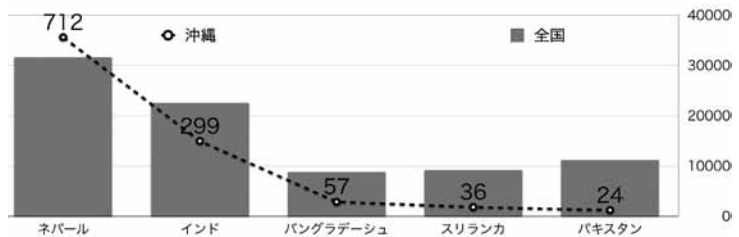


図1：日本における南アジア系移民(単位：人)

日本全体と沖縄県内とに

においてネパール人が最大人数を示し（全体：31,537、沖縄県：712人）、第二位にインド人が位置する（全：22,526、沖：299人）。米国人などと比較してこれらの人数は比較にならない程小さい。2014年度12月発表統計で沖縄県内の米国人は2,382人[法務省入国管理局 2015]、同年度でインド人の数は300人弱である。これらの統計に在日米軍基地内で働く米国人は含まれないだろうから、実際のインド人人口の規模の小さいことが際立つ。また統計で増加実体の確認はしていないが、近年は日本においてネパール人の増加が顕著であることから、歴史的には南アジア系移民の中でインド人は、第一位の規模があったと言えるかも知れない。

では、インド系移民の日本国内の分布はどうであろうか。前掲の2014年度在留外国人統計によれば、大きな居住人口が東京圏（茨城、千葉、埼玉、群馬、栃木：12,147人）、横浜圏（神奈川県：3,595人）、神戸圏（兵庫、大阪、京都：2711人）に確認できる。東京圏では沖縄県の実に約40倍、横浜圏と神戸圏では約10倍前後の規模となる。1990年統計では、滞日インド人数は3107人との報告もあることから、この25年間では飛躍的に増加したことになる[富永 1994：61]。さらに沖縄県内での外国人分布は、沖縄市が宜野湾市（普天間飛行場）に次いで2番目に多いと言われている。嘉手納空軍基地が吸引力となっているためである。

上記のような人口動態プロファイルを持つ沖縄インド人コミュニティであるが、これは日本におけるインド人移民の歴史の中で、どのように位置づけられるのだろうか。先行研究では、その歴史を大きく2期に分けて考えることが多い。つまり、オールドカマー（1991年のインド経済開放以前の移民）と、ニューカマー（1991年以後の移民）に分けるのである。前者は、1894年頃横浜に来た商人、1900（明治34）年頃に神戸に来た商人、1953年に沖縄に来た商人たちであり、後者は1990年代に台頭し、東京周辺に集住したIT技術者を中心としたインド人である[富永 1994、1995、1999][澤 2004]（図2参照）。現在、沖縄市のインド人コミュニティ人口は、160人程度と推定されるため[小日向 2012e、2012f]、沖

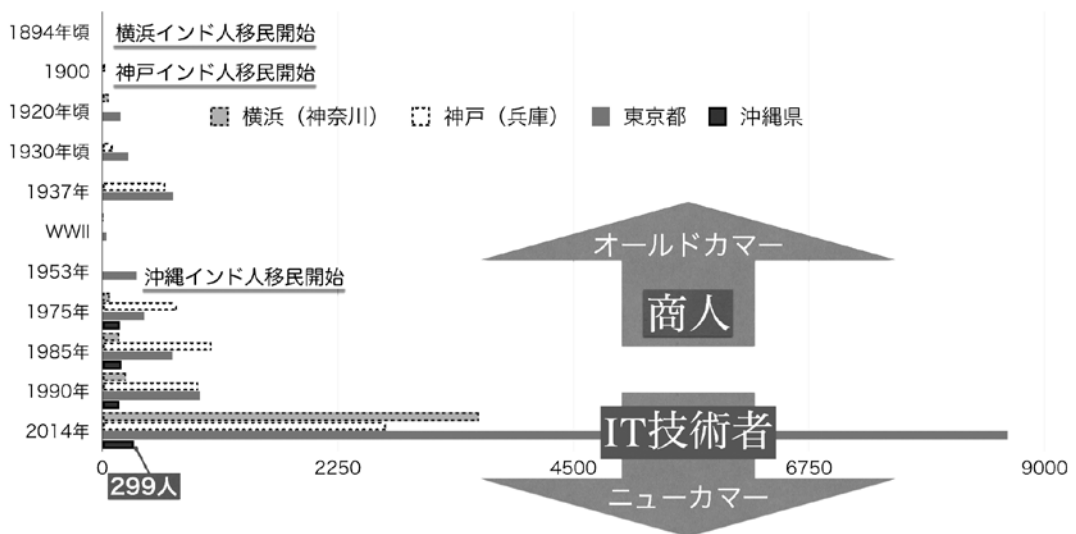


図2：日本のインド人移民の歴史 (単位：人)

縄県在住インド人の半分程度を占めることになる。

さて、1953年より米軍基地との関係から沖縄市で商売を開始したインド人たちは、その中心街である空港通り（ゲート通り）と（中央）パークアヴェニューに商店を構えたテラーが中心であった。もともと、異国間通商の共通語である英語にも親しんだインド人が、米軍関係者を商売相手とすることを選んだことも容易に想像がつく。彼らが沖縄を選択した理由も、米軍基地が存在したからに他ならない。

図3には、やや古いデータであるが沖縄市とその周辺のインド人集住地域を示した。調査地で得た知識ともおよそ合致する。テラーや現在の衣料品店などの仕事の場合は、嘉手納米軍基地前の空港通り（ゲート通り）とこれと平行するパークアヴェニューに集中する。この地域には多くの商店が存在し、また後に述べる沖縄市の音楽文化の中心となる「コザ・ミュージックタウン・音市場」が存在するため、同市商業の中心である。しかし、周辺の大規模商業施設の開店などで商売環境は悪化している<sup>6</sup>。

ともあれ、彼らが基地関係者を顧客の中心とした商業活動を行ったことは、その周辺の日本人社会との関係および音楽による関係性の構築のあり方にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。彼らの生活の中心は米軍基地でありホスト社会である沖縄市民との交流は控えめだったようである。日本人との結婚の例も少なく、一部の例外を除き多くは本国や海外在住の同一コミュニティ（シンディー商人）の人々と結婚した[小日向 2015b]。

総括すれば、1. 1953年より始まった沖縄へのインド人移民は、日本へのインド人移民の歴史のなかでオールドカマーに分類され、商人が多い。1990年頃より急速に増加したIT技術者を中心とするニューカマーのインド人移民とは性格を異にする。2. 沖縄のインド人コミュニティの多くは、沖縄市<sup>7</sup>（旧コザ市）および周辺に多く集住している。



図3：インド人集住地域（沖縄市）

#### 4. 集住地域

ここでは、沖縄市とその音楽文化について概観する。沖縄市はその前身時代より、多くの音楽家を引きつけて来た。戦後復興期より沖縄民謡の伝統音楽家が集まり、また戦後復興のシンボルとなったエイサーが盛んだった[沖縄市文化観光課 2015：10-11]。市の公式Webや街中にも、「エイサーのまち沖縄市」はロゴマークや標語として掲げられている（写真1）。また1970年には、有名レコード店キャンパスレコードもこの地に創業し、販

売のみならず音楽制作も手がけ多くの音楽が生まれた。また米軍人を対象とした商業・娯楽施設も多く、'60年代より沖縄ロック、'70年代にはフォークソングが、'80年代には伝統音楽を元にした新たな音楽ウチナー・ポップが流行した<sup>8</sup>。2006年に実現した「ミュージックタウン構想」により、「コザ・ミュージックタウン・音市場」がオープンしており、年間を通じて多くの音楽イベントが開催されている。

伝統音楽、米国経由のポピュラー音楽、音楽教室、音楽イベントが盛んな音楽の街、沖縄市の中にあり、インド人コミュニティの音楽は、沖縄市市民にはあまり知られていない。その理由の一つは、彼らの来沖の動機が、米軍相手を念頭にした英語による商売であったため、ホスト社会日本人との交流が進展しなかったと考えられる<sup>9</sup>。



写真1：エイサーのまち沖縄市  
2015年3月15日筆者撮影

## 5. 宗教施設と宗教音楽

### a. 寺院

本項では、彼らのコミュニティ維持機能を果たす場所となっている宗教施設について概略する。コミュニティの中心にあるのは、ヒンドゥー・マンディル (Hindu Mandir、ヒンドゥー寺院)<sup>10</sup>と呼ばれる施設である。1985年にインド人コミュニティの積立金、本土や海外インド人からの寄付金により設立された。新造ではなく、外国人向け賃貸住宅の玄関にドームを取り付け、外壁を朱色に塗装して改装したものである[富永 1994: 83]。資金の大半は、現在日本全国にホテルチェーンを展開するインド人実業家の寄付だったとのことである[小日向 2015b]。インド本国で一般に見られる寺院に比し、簡素な造りとなっている(写真2)。また、沖縄県内でインド人が利用する宗教施設はここ1箇所とみられる。ヒンドゥー教、シク教、ジャイナ教、イスラーム教の宗教施設が整う神戸に比し、宗教的バラエティーに乏しい。これは沖縄内インド人の出身地が、主にグジャラート州やその周辺地域など西インド地域に限定されているためではないだろうか。この点は、全メンバーに対する網羅的質問票調査をまだ実施できていないため、今後の確認が必要な点である。



写真2：ヒンドゥー寺院  
2012年3月15日筆者撮影

## b. 祭壇

建物玄関を入ると右手に広がる大広間の奥に、神像を安置する祭壇がある（写真3）。ヒンドゥー教の神々（クリシュナ、ラーダー、サラスヴァティー、ドゥルガーなど）、シク教の教祖グル・ナーナクの名前と経典『グル・グラント・サーヒブ』を備える壇、インドの新興宗教者サティヤ・サーイー・バーバー（Satya Saī Bābā [1926-2011]）の像と写真が見える<sup>11</sup>。ここに参集する人々の故地は現在のパキスタン東部のスインド（Sindh）地方であることから、本寺院の実体はシク教の宗教施設グルドゥワラーの性格とヒンドゥー寺院を兼ね備えた融合的な施設であると考えてよい。このような形態を持つものが神戸にも存在し、かつ本国から沖縄に呼ばれた司祭が、東京や横浜のスインディー寺院で祭事を実行する事例があるとの報告がある[東 2009：106-107]。

また、定例のバジャンの会は月曜日午前中の開催ではあるが、日曜日にはサーイー・バーバーの日本人信者も同施設に参集して宗教歌バジャンを歌っている。そのためこの聖人像や写真も祭壇に安置されている。故地での個別アイデンティティを超越して、外地におけるインド人マイノリティとしての協働を目的とした結果、「信じる心」を広く解釈した施設として機能しているのだと考えられる。後に触れるが、日曜日午前中のサーイー・バーバーの会へは、インド人の一部も日本人も参集しており、その宗教空間においては一つのアイデンティティを共有しているようにさえ見える。

## c. バジャンの会の式次第

本項ではまず、月曜日午前中を定例とするバジャンの会について説明する。参集者はインド人のみである。寺院内では男性も女性も頭部を布で隠す（写真5）。寺院管理や祭事の告知は聖職者ではなく、コミュニティ内の世話役である世俗的リーダー（K氏）が担う。男女による歌唱は、参集者が持ち回りで先唱し、残りの者が応唱する。参集者（男性）の中で、伴奏の中心を担う膜鳴楽器ドーラク（Dholak、二面太鼓）奏者は、常に同一人物であるようだ。また、西インド地域によく見られる体鳴楽器チムター<sup>12</sup>（Chimtā）やその他小型のシンバル型体鳴楽器マンジラー（Manjīrā）といった様々な鳴り物、手拍子などでリズムを取る。この祭事によく参加するメンバー内には旋律楽器を演奏する者がいないこともあり、音楽の構成は、歌唱とリズム楽器の伴奏となる（写真4）。

バジャンの会の大きな流れは以下のとおり、全体で1時間程度を要する。



写真3：ヒンドゥー・マンディルの祭壇  
2015年3月9日筆者撮影



写真4：ドーラク（手前）とチムター（奥）  
2015年3月9日撮影

1. 供物供養: ミルク、果物などを祭壇のヒンドゥー教神像へ供え、スィク教経典『グル・グラント・サーヒブ』に礼を捧げる。祭壇のサーイー・バーバー聖像・写真への礼拝はない。
2. 聖句朗唱: サンスクリット語が中心。
3. バジャン<sup>13</sup>: およそ 13 曲程度を、オムニバスのように歌う。先唱者に続く応唱合唱で詩節を通常 2 度繰り返して行く。
4. アールティー (Ārtī、火の儀式): シヴァ神などの神の名を繰り返す。
5. 聖水の儀式: 聖水を神像にかけ、参集者の頭にも順にかけて清める。その後、プラサード (お下がり) をいただく。
6. スィク教経典『グル・グラント・サーヒブ』の朗読 (パンジャブ語) とそのヒンディー語翻訳の朗読。
7. 終了の儀: 神像へミルクを供える。



写真5: バジャンの会  
2015年3月9日筆者撮影

#### d. 宗教歌の構成要素

現時点では、彼らの宗教歌の音楽分析は中途段階であるため、本項ではその概要の説明にとどめる。歌唱は男女の混声である。先に述べたように、先唱者の独唱と応唱者の合唱を交代させる。テキストは、デーヴァナーガリー文字表記によるヒンディー語訳版『グルヴァーニー (Gurvānī)』である<sup>14</sup>。これがスィンディーのスィク教徒にとり一般的な版であるとは考えにくいと、このことも地方を越えてヒンドゥー教を受け入れたことと同様に「インド人」をより広く受け入れる措置であるとも考えられる。

旋律楽器を使用しない理由は、第一に小さなコミュニティ内に旋律楽器を演奏できる人材がないことであろうが、これがスィンディーのスィク教徒に一般的なことかどうかについては、確認が必要であろう。後のインタビューで、サーイー・バーバーの会では、日本人でギター (インド様式) などの演奏が得意な人物に旋律担当を依頼したことがあるとの情報を得ているので、旋律楽器の欠如は単に演奏者調達の可否によるものかもしれない。

リズム楽器の種類については前述のとおりであるが、その使用は男性に限られていることが特徴である。北インドの民謡ファグアーやその他多くのインドの民俗音楽を始め、芸術音楽についても、女性による器楽演奏の排除の傾向が見られることと共通する。

#### e. バジャンの会とその他の集会

本稿の対象としたバジャンの会は、毎週月曜日の定例会である。その他、ヒンドゥー暦の祭事日程に合わせ、年間を通して様々な集会が催される。直近では、2015年11月11日(水)夜にはディーワリー祭(新年)が行われ、ラクシュミー神とガネーシャ神に対するアールティー儀礼などが行われた。また同10月22日(木)夜には、ダシューラー(ラーマ神勝利の10日間祭)を、同9月27日(日)朝には、シルディ・サーイー・バーバー誕生祭、同日夜にはガネーシャ神に対するアールティー開催のアナウンスがあった。

月曜バジャンの会への参集者は、観察やインタビューによれば多くて20人程度、その



時々事情により増減があるようだ。ただ男女の割合は総じて、男性が多い傾向のように見受けられる。また年齢の比較的高い層が熱心に通っており、定例会では10代、20代などの参加が少ないことが悩みであるとの見解が多い[小日向 2015b、2012e、2012f]。年間の大きな祭事には10代までの子供や20代の若者も参加するとのことである。これらの大きな祭事の中には、インドでも例えばディーワーリー商戦のような形で世俗的イベントの様相も持ち合わせるものもあるため、こうした祭事には若者も参加しやすいことが理解できる。一方、定例会は純粋な宗教祭事との性格が強い。

以上をまとめれば、以下となる。

1. ヒンドゥー・マンディルは、ヒンドゥー教の諸神、シク教の経典、新興宗教者サーイー・バーバーの像も祀る複宗教的施設である。
2. 毎週月曜日午前中にバジャンの会を開催し、コミュニティメンバーが宗教歌謡を歌う。
3. 同寺院ではバジャンの会のみではなく、ヒンドゥー暦の様々な宗教祭事を行う。
4. 同寺院は、滞沖インド人コミュニティの精神的な支えを提供しているが、ここに頻繁に訪れるのは相対的に年齢の高い世代であり、10代～20代の若者は宗教歌謡には参加しない傾向がある。

## 6. 日本人との関係

### a. 日本サティヤサイセンター沖縄センターとの接点

沖縄市のヒンドゥー・マンディルは、新興宗教者サティヤ・サーイー・バーバーの国際サティヤ・サイ・オーガニゼーションの世界ネットワーク（126カ国1,200のセンター[2010年時点]）の日本支部の位置付となっている。これは、1960年代にシュリー・サティヤ・サーイー・バーバーが興したヒンドゥー教の新興宗派であり、ヒンドゥー教に見られる聖者信仰の一形態である。その教えを伝えるために、宗教歌謡バジャンが歌われる。

日曜日の午前中に催されるサイセンターとしてのバジャンの会には日本人が参集し、インド人コミュニティからも数人が参加する。日本人グループの世話人N氏が窓口となり、メンバー間の連絡や会の運営を担う。

メンバーはセンター発行の音源からヒンディー語や日本語のバジャンを聞き覚え、祭事前の練習時間に決定した「プログラム」により、順番に先唱を担当する。他のメンバーは、応唱として合唱で応える形式を取る。

## 7. 結語

本稿は現在進行中の調査プロジェクトの中間報告であるため、現段階では多くの未調査事項が残った。まず、沖縄ヒンドゥー・マンディルで祭事として行われる宗教歌謡の呼称は何か、との点である。本稿では暫定的にインドの宗教歌謡の多くのジャンルで使用される「バジャン」を当てて、定期的開催する歌唱祭事自体は「バジャンの会」とした。確かにインド人たちはこの用語で外部者に説明したりするが、彼らのコミュニティ内部では

どのような呼称を用いているのかは、未だはっきりしない。パンジャブ州のシク教徒では、「キールタン (Kīrtan)」または「グルマツト・サンギート (Gurumat sangīt)」などの用語を宗教歌謡に使用するが、沖縄のインド移民では、どうかという点である。第二に、彼らの宗教歌謡のレパートリー全体はどの程度のものかという点である。これに伴い、毎週開催するバジャンの会での曲選択には、何らかの基準が存在するか、という点も気にかかる。これらの音楽上の諸点については、さらにインテンシヴな継続調査を要する。

次に、滞沖インド人の宗教音楽と神戸、横浜などのシク寺院での音楽の関係である。「5. 宗教施設と宗教音楽」の項目 b. で触れた東の報告のように、インド本国における何らか共通の人材を通じて関係を持っている可能性も大きい。宗教上のみならず、日本各地のインド人コミュニティ間の全体的な関係性については、いまだ不明な点が多いと言わざるを得ない。

最後に、滞沖インド人と日本人の関係性である。上述のように、ヒンドゥー・マンディールにおいては、日本人のインド宗教への帰依者たちとの協働の様子が観察された。ただ、沖縄市の音楽文化全体の視点から彼らを見れば、何らかの音楽イベントにおいてインド人コミュニティがその特徴を生かして参加したなどの事例は、現在までないようである。これは先に見たように、彼らの移民の動機として在沖米軍の米国人との商業上の関係があり、その後も英語を中心とした活動が中心であった（そのみで生活に支障がなかった）ため、日本人社会への融合、文化上の協働の意識が働きにくかったためではないかと思われる。インド人コミュニティについては日本人側からの興味が示され、TVの取材申し込みなどもあったようであるが、その全てについて辞退したとのことである[小日向 2015c]。ホスト社会の中で、目立たないことを意識している様子が感じられる。

このような状況があるにしろ、彼らを取り巻く経済環境は大きく変化しているように思われる。ゲート通りの多くの店にはシャッターが降り、観光客も地元の人々も沖縄市を訪ねても、近隣の大型施設に誘導されてしまうようである。パークアヴェニューで開催するセントパトリックデーなどのイベントは人々を一時的に引きつけているようであるが、イベント以外の日は静かな商店街となっている。その中でインド人コミュニティは、このまま沖縄での生活を継続するか、日本の他地域へ移住するか、海外に出るか、様々な選択に迫られている。

ホスト社会の中にいるマイノリティの音楽の変容がどのような形をとり得るのかは、世界音楽研究の興味深いイシューである。この点から見れば、滞沖インド人の宗教音楽は、その音楽の変更を迫られるようなホスト社会からの圧力を受けていないように思われる。むしろ、10代～20代の若い世代がこうしたヒンドゥー・マンディールでのバジャンの会に参加しない傾向がある点は、彼らのほとんどが米軍関係者たちのためのインターナショナルスクールへ通学することが多いことから説明できる。彼らは沖縄に生活をしながら、米国文化の影響化にあるのである。これらの観点から、さらに調査を継続したい。

註：

- 1 本研究は JSPS 科研費 21520161、および東京音楽大学附属民族音楽研究所フィールド調査費補助制度（2014 年度）の助成による。また本稿は、日本音楽学会第 66 回大会（青山学院大学、2015 年 11 月 15 日）口頭発表「沖縄インド人コミュニティーの音楽」に基づく。
- 2 融合や変容の度合いや形態には、様々な濃淡がある。北米インディアンの状況を報告した[北原 1962]は、その濃淡について言及している。
- 3 社会制度の中で異文化音楽が受容される例として、[小日向 2015e]は学術制度（音楽学）における「世界音楽」概念の移入と異文化研究の進展を、また[小日向 2010b]は民間文化財団による異文化受容の推進を、[小日向 2012d]は音楽出版による異文化音楽の普及を扱った。制度内や公共圏に提示された異文化音楽の情報に刺激を受けて個人が私的関心を広める事例として、[小日向 2014a、2013a]はアカデミックな音楽教育環境（作曲科）にある作曲家が作品創造の一貫として異文化音楽であるインド音楽へ関心を高める例、[小日向 2012a、2012b、2010a]は、音楽に関心を持つ人々が様々な契機により南アジア音楽に興味を持ち、音楽学習を深めて表現者として活動する事例や、そこで生み出されるハイブリッドな音楽様式について考察した。日本と南アジア音楽の関係を植民地接触から観察する機会は存在せず、また移民を通じた南アジア音楽受容の事例もそう多くないが、後者は近年のグローバリゼーションによる人口移動により、日本在住となる南アジア人の人口も増加する傾向があるため、今後の研究対象として興味深い。
- 4 「ディアスポラ」の本来の意味である「離散」に照らし、一度移住した後は父祖の地に帰ることができない状態にある場合のみについてこの用語を使用すべきだとの見解もあるが、ここではやや広い意味に使用する。
- 5 インド人が外部の人間に対して説明する場合、「バジャン」を使用しているが、メンバー内での用語法は現段階では不明。
- 6 2015 年 4 月 25 日に沖縄市南部に隣接する中頭郡北中城村地区に開業した大型商業施設イオンモール沖縄ライカムに象徴されるように、車社会の沖縄県では那覇市や沖縄市の商圈に大型店舗があり、空港通りやパークアヴェニューの伝統的商店は疲弊している。この地域の伝統的商店のインド人商店主たちへのインタビューから、その経済的状况などを調査した記録がある。[山崎ほか 2012]を見よ。
- 7 1972 年の沖縄日本返還の後、1974 年にコザ市と美里村が合併し沖縄市となった[沖縄市 2015]。
- 8 ウチナー・ポップの代表的グループ「りんけんバンド」のリーダー照屋林賢を始め、沖縄市出身アーティストは多い。
- 9 こうした一般的状況にもかかわらず、数は少ないが日本人と結婚し家族を形成する事例も存在する。
- 10 この場合の「Hindu」は、「ヒンドゥー教」であると考えられるが、「6. 宗教音楽」で後述するように、彼らの宗教音楽や儀礼にはシク教的要素も多分に含まれているため、この名称は「インド人の」と解釈できるかもしれない。
- 11 写真 3 では、左の女性の前にクリシュナ、ラーダ、サラスヴァティー、ドゥルガーな

どの神像、中央男性の前に経典『グル・グラント・サーヒブ』、右手には、サーイー・バーバーの像が見える。また、正面天井からは「GURUNANAK」の名が装飾とともに懸架されている。

12 いわゆるトングに複数のシンバルを付けたもの。

13 註5を見よ。

14 寺院備え付けの版は、パンジャブ州のシク教徒であるパンジャービー・シクが使うパンジャービー語版ではなく、発行：Nirguna Balik Satsang Maṇḍal、訳：Lakshman Chelaram の版。

#### 参考文献：

東，聖子．

2009 滞日シク教徒の寺院と信仰 — 東京のグルドゥワーラーから考える移民と宗教とのかかわり—．移民とともに変わる地域と国家（国立民族学博物館調査報告）．Vol. 83, p. 101-120. [http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/3994/1/SER83\\_008.pdf](http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/bitstream/10502/3994/1/SER83_008.pdf). (アクセス日：2015年12月20日)．

堂前，亮平．

1990 在日インド人の居住地域形成と異文化接触 — 沖縄と神戸を比較して —．住宅・土地問題研究論文集．Vol. 16, p. 185-199.

平林，博．

2009 随想：沖縄とインドの絆を求めて．月刊インド．Vol. 106 (2009.1), p. 11-12.

法務省入国管理局．

2015 市区町村別 国籍・地域別 在留外国人 (14-12-07)．在留外国人統計．<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001133760>. (アクセス日：2015年12月20日)．法務省入国管理局．

2014a 第1表 国籍・地域別在留資格(在留目的)別在留外国人．在留外国人統計（平成26年版）．6-7.

2014b 第4表 都道府県別国籍・地域別在留外国人．在留外国人統計（平成26年版）．106-109.

北原，順男．

1962 Flathead, Blackfoot, Dakota 各インディアンの民俗音楽における文化変容と残存，融合．季刊民族学研究．Vol. 26(3), p. 201-204.

小日向，英俊．

2015a フィールドノート（2015年10月18日、N氏インタビュー）．未公開．

2015b フィールドノート（2015年3月8日、V氏インタビュー）．未公開．

2015c フィールドノート（2015年3月8日、B氏インタビュー）．未公開．

2015d Sangeet on the Internet : As a New Research Subject and Tool (A paper read at the 43rd ICTM World Conference (ICTM 2015), held at the Kazakh National University of Arts in Astana, Kazakhstan on 21 July 2015).

2015e 世界音楽：日本における受容とその意味．伝統と創造：東京音楽大学附属民族音楽研究所紀要．Vol. 4, p. 15-28.

- 2014a Asian Syncretism in East Asian Music : Composers in Modern Japan (A paper read at the Fourth International Symposium of the ICTM MEA, held at Nara University of Education on 22 August 2014).
- 2014b インドを奏でる人々 — 現代日本におけるインド音楽受容とライフヒストリー — (MINDAS 第 4 回合同研究会、2014 年 1 月 25 日、国立民族学博物館 4 階大演習室、口頭発表).
- 2013a 邦人音楽作品における「南アジアもの」— 合唱と即興 — (一般社団法人東洋音楽学会第 64 回大会、2013 年 11 月 10 日、静岡文化芸術大学、口頭発表).
- 2013b インド音楽・舞踊の日本における受容 (MINDAS 第 5 回合同研究会、2013 年 2 月 16 日、国立民族学博物館での口頭発表).
- 2012a 現代日本におけるインド音楽の変容 — 音楽多様性と音楽ハイブリディズム (東洋音楽学会第 63 回大会、2012 年 11 月 11 日、国立音楽大学、口頭発表).
- 2012b インドを聴く・見る・演じる人々 —— 日本における異文化音楽受容史の視点から (日本南アジア学会第 25 回全国大会ビデオ報告、2012 年 10 月 6 日～7 日、ドキュメンタリービデオ).
- 2012c 無料動画配信サービスにおける世界音楽受容と発信 — 南アジア音楽の事例 ((社) 東洋音楽学会東日本支部第 64 回定例研究会、2012 年 4 月 21 日、東京藝術大学、口頭発表).
- 2012d South Asian Music Recordings in Japan. 国立音楽大学研究紀要 . Vol. 46, p.127-136.
- 2012e フィールドノート (2012 年 3 月 16 日、D 氏インタビュー). 未公刊 .
- 2012f フィールドノート (2012 年 3 月 15 日、V 氏インタビュー). 未公刊 .
- 2010a 1980 年代以降の南アジア音楽受容史 — 「私心」による交流の未来 ((社) 東洋音楽学会第 61 回大会、2010 年 11 月 14 日、東京学芸大学小金井キャンパス、口頭発表).
- 2010b The reception of cross-cultural musics in modern Japan and the role of Min-On : with a focus on South Asian musics. 国立音楽大学研究紀要 . Vol. 44, p. 93-103.
- 古賀, 政則ほか .
- 2000 移民から市民へ — 世界のインド系コミュニティ —. 東京大学出版会 .
- 沖縄市 .
- 2015 沖縄市公式 Web. <http://www.city.okinawa.okinawa.jp>. (アクセス日 : 2015 年 12 月 20 日)
- 沖縄市文化観光課 .
- 2015 コザソース (沖縄市文化観光課・沖縄市観光協会発行、沖縄市観光情報マガジン). 050 (2015 年 2 月).
- 澤, 宗則 .
- 2004 グローバリゼーション下のディアスポラ : 在日インド人のネットワークとコミュニティ (科学研究費成果報告書 [基盤研究 (c)(1) : 13680081]). [http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle\\_kaken/K0001496](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kaken/K0001496) (アクセス日 : 2015 年 12 月 20 日).
- 富永, 智津子 .
- 1999 (続) インド人移民社会の歴史と現状 — 横浜・神戸・沖縄 —. 日印文化 (創立 40 周年記念特集号). p. 52-79.

- 1995 日本のインド人移民 — 歴史と現状 —. アジ研ワールド・トレンド. Vol. 8, p. 13-15.  
 1994 インド人移民社会の歴史と現状. 日印文化 (関西日印文化協会創立 35 周年記念特集号). p. 58-95.

山崎, 孝史ほか編.

- 2012 沖縄市コザ地区調査報告書—外国人店舗を中心に—. 大阪市立大学文学部地理教室.  
[http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/yamataka/Koza\\_report\\_for\\_web.pdf](http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/yamataka/Koza_report_for_web.pdf)  
 (アクセス日: 2015 年 12 月 20 日).

関係団体:

公益財団法人日印協会: 1903 年設立。月刊誌『月刊インド』を刊行。日印経済人の関係を築く活動が中心。<http://www.japan-india.com>.

沖印友好協会: 2003 年設立。会員数 = 約 100 人 (2009 年)

Sathya Sai International Organization : <http://www.sathyasai.org>.

Sathya Sai Organization Japan : <http://www.sathyasai.or.jp>.

Much has not been studied about Indian community living in Okinawa and its music. In Okinawa City, they established a "Hindu temple" in 1985, which is religiously syncretic and functions as the center for community living. Hindu gods/goddesses are placed on the main altar, while the holy scripture of Sikhism is placed on the main platform.

Every Monday, members gather at the temple to sing *bhajan* songs to praise Hindu gods/goddesses and the songs related to Sikhism. The songs have monophonic and antiphonal structure, sung as a chain of tunes. A typical *bhajan* gathering takes around one hour. Male participants usually play percussion instruments, including *dholak*, a folk drum, *chintā*, musical tongs, *manjīrā*, a pair of cymbals, and others.

(本学講師、音楽学)

